

今一度、立ち止まって考える「タブレット・ICT教育」 ICTを生かせる授業のあり方とは

前回の記事でも指摘したように、ICT・タブレットは優れた機能や大きな可能性があるものの、コロナ禍での準備不足の中で一気に配置されたため、様々な戸惑いや、現場の課題、問題が出てきています。とりわけ、授業のあり方に大きな影響を与えかねない課題を懸念する声も教職員から上がってきています。

どの学年でも、たくさん使うことが目的に？

ICT機器やタブレット導入には従来から、本来の「授業や学級運営を円滑にするため」のものが委員会や管理職から「出来るだけたくさん使うこと」が求められ、評価される中で、目的と手段が入れ替わってしまうということが指摘されるようになりました。

もともと文科省がICT機器の導入にあたって有識者と論議を積み重ねてきた知見では、明確に、従来の指導のあり方を基盤とした上で、あくまでツールとして、発達段階、教科、活用目的や場面に留意して利用すべきであるとしています。

しかし、現実には小1からタブレットを配布し、持ち帰りも含めた指導や、書き入力も正確さが疑問な上、文字の書き方も定着していない段階からの導入に、教師側の見通しや原則よりも、活用の機会を増やすことが重視されかねない懸念さえあります。

韓国の教訓

すでに先行して1人1台の端末を配置した韓国では、現場から

- 「わかったつもりになっているが頭に入っていないのでは」
- 「楽しいと言いが内容が身についていないのでは」
- 「読書量が減少」
- 「問題解決能力が低下する」

紙と鉛筆・黒板とチョークの授業を置き換えるものではない

■ 黒板等を使った指導も効果をあげているところであり、従来の指導の在り方を基盤としつつ、これに加えて情報通信技術を効果的に活用して、指導方法を発展・改善していくことが求められる。

■ (ICTは) あくまでもツールであり、その活用に当たっては、学校種、発達の段階、教科、具体的な活用目的や場面等に十分留意しつつ、学びの充実に資するものでなければならない。

「教育の情報化ビジョン」2011年文科省より

子どもによって違いが

タブレット端末は、学力の高い層にとっては、自ら次々調べることで新しい知識や見方を手に入れ、知的な欲求を充足させ、さらに視野を広げていく可能性を持っている。

一方、そうではない層の子どもにとっては、最初からあまりに多くの情報があつては、生徒児童はそれを処理しきれずに情報の海に溺れてしまうことは容易に想像されます。

あふれる情報のなかで「フィルタリング」に落ち込み、狭い情報や見方にはまり込むことさえ懸念されます。中には、本来の趣旨以外の分野に、タブレットを「自由自在に使いこなす」子どもさえいます。

本来のICTを生かせる授業とは

ICT機器を有効に活用して成果を上げる事例では、本来の授業力の高い先生ほどICT機器を効果的に活用できる可能性を持っている(尾木直樹氏)と言われています。

「どのような力を育成したいか」という明確な狙いを持ち、子どもの実態や狙いに基づいた教材の選択や、授業の中の活動の組立を構想する力があつてこそ、ICT技術を生かせると言います。

ICTの特性を活かした活用に

2014年の「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ)ではICTの特性をいかした学習場面での活用例として3点を挙げています。活用已成功している学校事例では「ICTの特長を生かすことにより、これまで実現が難しかった学習場面

【ICTの活用により容易となる学習場面の例】

- ① 距離や時間を問わずに児童生徒の思考の過程や結果を可視化すること 【思考の可視化】
 - ② 教室やグループでの考えを、距離を問わずに瞬時に共有すること 【瞬時の共有化】
 - ③ 観察・調査したデータなどを入力し、図やグラフ等を作成するなどを繰り返し行い試行錯誤すること 【試行の繰り返し】
- 2014年の「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ)

新歓まなび庵

「今だからこそ、子どもが

つながり合うクラスづくりを」

4月3日(土) 10:00～ 枚方市民会館 第4会議室

実践報告: 西岡直美さん・古崎菜穂さん

昨年、6年生と中学3年生を担当された先生による、子どもたちをつなげる様々な学級づくりの工夫と子どもたちの成長の様子をリレートーク。その後、分散会にて交流会も行います。「新学期、どう子どもたちと関係を作ればいいのか?」「初めての担任だけど、大丈夫かな?」など、新学期へ向けての疑問や不安も気軽に話し合います。クラスで使える楽しいミニゲームも紹介します。

是非、たくさんのご参加お待ちしております。

どなたでも参加できます当日参加も歓迎

資料代 300円

全教・枚方教職員組合 青年部

が容易になるケースが生まれ、一斉学習、個別学習及び協働学習を効果的に行うことができるようになる。」「ともしており、できるだけたくさんさんの場面で使いことをよしとしているわけではありませんでした。

日本の授業力

とにかく新しい教育・授業

が求められる風潮がありますが、日本のとりわけ小学校の授業は世界的にも極めて高く評価されています。「家庭の格差に関わりなく、学力をつけられている」「マニュアルではなく、子どもの実態に応じて、教育活動を構想し、工夫した授業活動を展開している」「教員同士が自主的に交流して授業力を高めている」これらの従来の優れた授業のあり方が、ICT・タブレットの導入で経緯されたり、変質するようになっているのはありません。

本来の活用のあり方を、現場で十分理解、論議しながら取り組むを進めることが必要ではないでしょうか。

あなたも、全教・枚方教組に加入を!